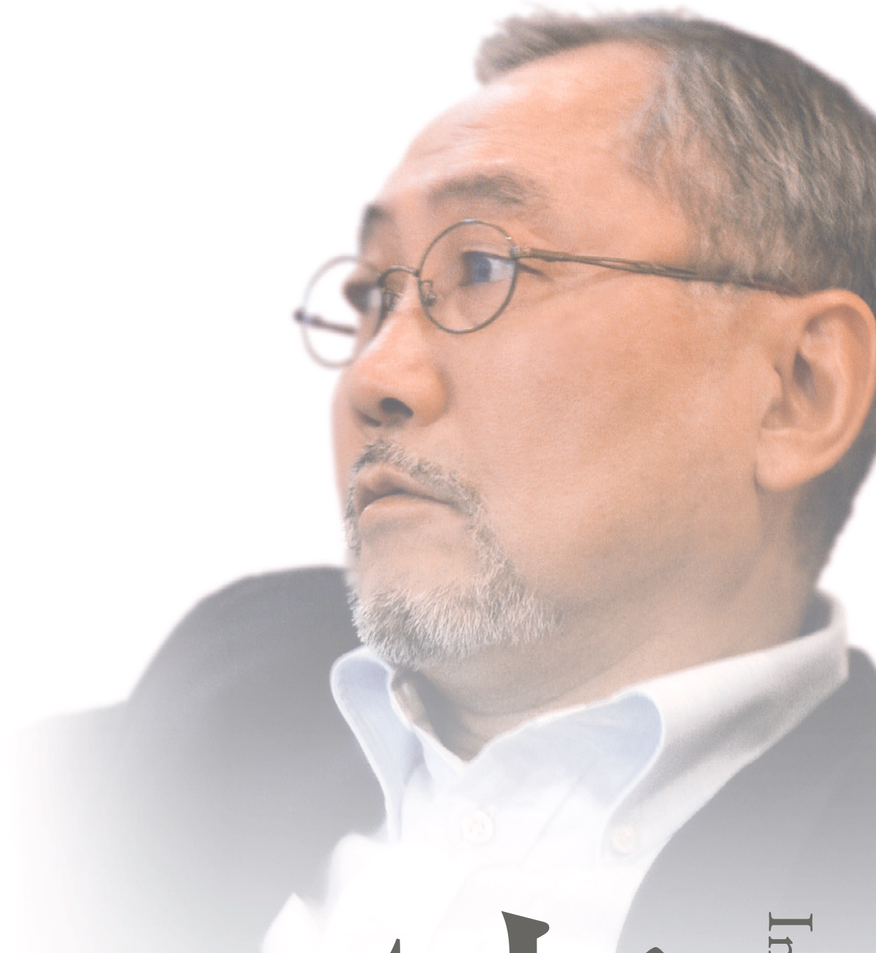


宮本輝「優駿」を語る

Interviewed to Teru Miyamoto concerning "Yushun"

優駿を執筆しようと思われたきっかけは何ですか？

「優駿」を書き出したのは僕が33歳か34歳のときですが、それまで競馬小説といいますと、賭博の世界を描いたギャンブル小説がほとんどでした。サラブレッドの世界とはもっと奥の深いもので、馬券とかギャンブルというものを離れて、サラブレッドという馬の不思議さ、競馬の世界の神秘性みたいなものを文学にすることはできないか、と思って第一章を書き出しました。また小学5年生のときに、父親から買ってもらった「名馬風の王」という本が非常に深く心に残っていたんです。これは競走馬の祖先のうちの一頭であるゴドルフィンアラビアンという馬の生涯を書いた小説なんです。この本から、三頭の非常に優れた馬が交配を重ね続けることで、サラブレッドというものが次第に出来上がっていくという知識を得ました。これも書き出した動機のひとつです。

物語のタイトルとなった『優駿』というのは中央競馬会が昔から出している月刊誌のタイトルなんですが、自分が書こうとしているものに「優駿」という言葉くらいピッタリくるものがなかったものですから、それを使いました。

これはとんでもないものを書き出してしまったな、と思いました。門外漢、つまり場外馬券場で馬券を買っている程度の競馬ファンでは、到底書けない世界だということがすぐにわかりました。それから取材が始まったんですね。

サラブレッドという経済動物と、それに関わる馬主、調教師、厩務員、騎手、生産牧場、育成牧場だとかいろんな相関関係があって、もちろんそこには利潤が生まれますし、莫大なお金がかかってくるわけです。ですから、出来るだけ差しさわりのない、つまり僕の小説によって誰かが悪者扱いされるようなことがあってはよくないので、いろんな矛盾を僕自身も感じながらもそこのところは書かないようにしましたね。その取捨選択というのもなかなか大変な作業でした。

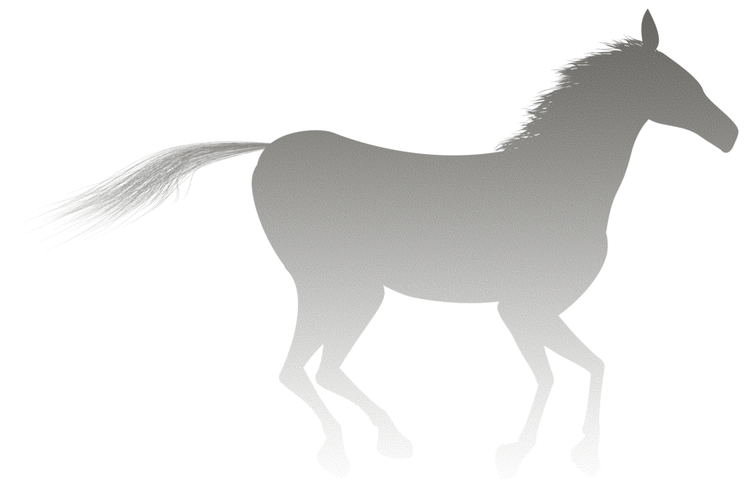
執筆開始当初の構想はどのようなものでしたか？

主人公となる仔馬が生まれるところから始めようとは思っていましたけど、どんな牧場にしようかさえも決まっていませんでした。とにかく書き出して、もう後はレースの馬なりってやつですよね。最後ダービーで終わろうとも思ってなかったですね。だから最後オラシオンをダービーに勝たすのか負かすのかっていうところで迷いました。勝たすとあまりにも小説的で、あまりにもドラマチックで。といって負けさすのもね、ここまで書いてきてそれはないだろうと。そうすると「あしたのジョー」みたいに勝ったのか負けたのかわからないような終わり方にするのかなど、もう最後までどうしたらいいのかわからなかったですね。ダービーのスタートが切られて走り出したところを書きながら、どうしようかなと思ってましたね。最後の直線に入ってもまだ迷っていましたよ。難しいところですよね。読んでいる人はたぶん勝つだろうなぁと思うわけですよ。そう思いながら書くとね、やっぱり負けさそうかなとか、鼻差で2着にしようかなとかね、いろいろ考えますよ。

「オラシオン」という名前はどのようにつけられたのですか？

「オラシオン」という名前は、仔馬が生まれたときはまだ決めてなかったです。非常に悩みましたね。覚えやすいものでしかも何か意味がある名前がよかった。それで英語やフランス語などいろんな辞書を引っ張り出してきましてね、偶然スペイン語にオラシオンという言葉があったんです。「祈り」という意味だったんですけど、これはピッタリだなぁと思って。

但し現実の競馬の世界に、オラシオンという名前の馬がいたら使えませんから。それを調べるのが大変でした。当時まだパソコンなんかもありませんし、簡単には調べられない。競馬界の知ってる人に、かつて日本にオラシオンという馬がいたかと聞いて回りましたね。苦労のかいあって、日本にはいないことがわかりました。しかし、それがもしも仮にヨーロッパにいたとかといっても、それはもう仕方ない。そこまで調べようがないですから。それでオラシオンとつけたんですよ。



宮本先生は馬主にもなられたそうですが、そのいきさつを教えてください。

書きはじめる前からかなりの取材が必要だということはわかっていました。でも実際書き出すと自分が思っていた以上のことをしなくてはいけなくなったんです。その第一が、自分が馬主にならなければどうにも書けないということがわかったということです。えらい目にあいましたね。

競馬の世界を取り巻くいろいろな人に話を聞きましたが、みなさん表面上のことしか話していただけなかったんです。もちろんこれは当然のことでしょうが…。「競馬のことを小説に書きたいらしいで」「なんとかという小説家が取材に来るらしいで」と言われても調教師にしても牧場にしてもどっちかというと迷惑なんですよ。所詮上っ面しか話せませんしね。騎手何人かと話をしてもね、兄弟子、弟弟子の関係とかもあって言えないことがあるんですよ。相手には下手すると、そこで何か不正なことが行われているといった「誤解」を生じるようなことを書かれないかという不安もあるでしょうしね。こちらは、そんなことは一切書きませんと言っても、向こうは警戒しますから。そうか、結局これではスポーツ新聞を読んでいるのと変わらないじゃないか。これはもう…馬主になるしかないなと思いましたね。この世界を知るたった一つの残された道は、馬主になることだ、馬主には本当のことを言うだろうと…。そういう訳で馬主になったんです。

そうなると、自分の馬が走り出すと、自分の馬に乗ってくれた騎手に電話をかけて、どうしてあの直線で急に失速したのか、というような細部まで聞けますよね。しかしたとえ馬主といっても結局はなかなか本当のことを言わないもんなんですよ。ですので、調教師のちょっとした言葉の抑揚だとか、騎手のちょっとした含み笑いだとかをこちらが読み取って解釈するしかありませんでした。そうしながら書いていったんです。

馬を自分ひとりで一頭買うなんて、小説家風情がそんなこと出来ませんでしたので、初めはお知り合いの馬主さん3、4人でお金を出し合って、そんなに高くない馬を3、4人で持とうという形ではじめたんです。ですが、なかなかそれだといい馬というのは買えないんですよね。あの当時でも、ちょっとしっかりした仔馬だとやっぱり2000万～3000万円しましたからね。ちょうどその頃に社台ファームの吉田善哉さんが、20人で馬を持つという共同馬主制度をつくりあげましてね。それをある人から紹介されて、それだったら僕も馬を持てると思い共同馬主になりました。それなら牧場にもいけるし、実際日本の馬産界のトップを走っている社台ファームの吉田さんともお話できるしね。いずれにせよ20人の馬主のうちのひとりになるわけですから。

馬主になられたその後のエピソードを教えてください。

時期的には、第二章、第三章を書き出した頃に馬主になりました。とにかく馬主になってわかったことは、馬のことはわからんということです。

競馬の評論家はみんな馬の能力能力と、心臓だとか肺臓だとか、内臓の強さ、筋肉の強さなどの身体的な能力のことばかり言います。しかし馬は結局心で走るんですよ。評論家たちは、その精神力といいますか、その馬の精神性というところまでは言及できないんですよ。やっぱりその馬の精神性までは、実際毎日管理している調教師、厩務員だとか乗った騎手だけがわかることでね、他の人間にはわからないです。

しかし、次のレースは間違っても2着ははずさないと、調教師が自信を持ってそう言ったレースがあったんですが、実際は10着にも入らない。これはどういうことだと聞くと、やっぱり結局のところは調教師にも騎手にもわからないんですよね。でも調教師も騎手もそんな言葉ではごまかせないですから、ちょっと4コーナーで外の馬に当てられたとか、口向きが悪かった、というようないろんな言い方をするんです。結局は馬が走りたくなかった、気がのらなかっただけということの方が多いですね。

だんだんとそういうところが見えてきました。馬は生き物ですからね。馬にそれぞれ癖もありますしね。人間には計り知れないものがありますよね。そんなわからんものに僕は高いお金を使っていたのか、という気持ちでした。

僕が馬主になって、馬主になったといっても弱小馬主ですけど…。一応作家としての目で自分の馬が走るのを見てきました。競馬では一番最初のデビュー、新馬戦というのがあります。新馬戦で2着以内に来ない馬はあまり大成しないですね。これは幼稚園児が運動会で走るようなもんですよ。一回もまだレースしたことのない馬なんですから、それは玉石混交ですよ。将来横綱になる馬もいるし、ついに一回も勝たずに消えていく馬も混じってるわけですよ。そこでヨーイドンで走るわけでしょ。少々騎手が下手な乗り方をしようが、体調が悪かろうが、仕上がりが悪かろうが、やっぱり強い馬が勝ちますよ。栴檀は双葉より芳し、というのが新馬戦ではっきりとわかるんです。だからどんなに鳴り物入りで、予想誌で二重丸が山ほど付くような馬でも、新馬戦で5着や6着で、次は2着に来て、次くらいに1着で、その後トントンとクラシックを制覇したという馬はあんまりいないですね。だから新馬戦というのは大事なんですよ。

最近は僕は大きいレースでも一切馬券は買わないです。しかし、買わないけど新馬戦だけは見ます。新馬戦でいい勝ち方をした馬だけは頭に入れておくんです。やっぱりそのうちの何頭かはクラシックレースに出てきますね。

ご自分の馬が走るときはやはり心配されましたか?

それはもう心配ですよ。だけどそれでは…ペットというわけではないですから、経済動物ですからね。しかし馬を走らせる身としては、怪我せんと一周回って来てくれたらええわ、と思うわけですよ。前の日までは絶対勝てよ、とか思ってるんですけど、いやいやもう3着以内でええ、パドックを回りだしますとね、5着でええと、本馬場入場になるといやいや8着でええで、それでゲートに入りかけると、もうええもうええ、怪我せんように、一番後ろでええから回って来いとね。そうなりますよ。だって足をポキっと折ったらそれでおしまいですから。安楽死処分ですからね。だから馬の病気のこともよく勉強しましたよ。どうして足の骨を一本折ったくらいで殺さなくてはいけないんだと。あれはもう人間みたいに直らないんです。人間は体のでかい人でも100キロでしょう。どんなに小さい馬でも400キロくらいありますから、自分の体を支えるまでは到底回復しないんです。

馬がレースに出て行くのにもいろんな難関があるんですよ、繊細な動物ですからね。いっぺん嫌なことがすり込まれると、もうそれが抜けないですね。ですから生まれて初めて鞍を乗せるというときには、ものすごく慎重にしないといけないんです。馬が嫌がっているときに無理矢理鞍を乗せると、鞍を乗せること自体を拒否するようになる。そうすると人間を乗せることも拒否するようになる。どんなにいい種馬とどんなにいい母馬との間で、未来を嘱望されて生まれても、競走馬としてデビューするまでの間に、もうそこで既に淘汰されていくんですね。

とにかく話になんてならないくらいお金がかかりますよ。一頭の優れたサラブレッドの周りに、いろんな世界のプロフェッショナルたちがたくさん絡んでくるわけですから。

1983年春 北海道早来社台ファームにて
「優駿」取材

右は新潮編集者（当時）岩波氏

社台ファームの吉田善哉氏とのご交流で印象深いエピソードを教えてください。

馬主になったことをきっかけに吉田さんとお知り合いになりまして、何回か北海道の社台ファームの牧場にいきました。その都度、吉田さんが今までずっと培ってきた競走馬に対する知識を、折につけて跡継ぎである息子さんたちに語っているのを、横で聞いていましたね。そういういろんなことが、吉田さんの言葉じゃなくてもう少し僕の形に変えたもので、それを他の人にしゃべらすというような形で「優駿」の中に言葉として出てきますね。非常に多くのものを吉田さんから学びました。

僕は今までいろんな人と会ってきたけれど、「この人は頭のいい人だな」、と舌をまくような人は５人もいないですよ。みんなそれぞれ頭のいい方なんですけど、勉強がよくできるというわけではなくて、はっきりとこの人はちょっと抜きん出て頭がいいなと感じさせる人という意味では、吉田さんは三本の指に入ります。彼は馬が生まれた瞬間に、走るか走らないかというのを見極めますからね。それほどの馬相眼というか、眼力を持ってた人ですよ。生まれたての子馬がよろよろ立ち上がって、その瞬間に一瞬で見分けるという、眼力があるということは、やっぱり人間に対してもそうですよ。

初めて合った瞬間に、その人の本質をどこか見抜くようなところがあるんです。馬相眼つまり人相眼みたいなものですね。これは馬の方が人間よりもっと難しいですよ。人間はしゃべりますし、自分の感情を言葉にしますから。馬はしゃべりませんし、姿かたち、あるいは表情、しぐさ、それから競馬の場合は血統ですね、そういうものを含めてぱっと一瞬で判断するわけですよね。そういうことを、もうずっとやってきた人ですから。ひとりの人間を見たときに、その瞬間、吉田さんにとっては一匹の仔馬なんですね。こいつは口ではいいこと言ってるけど、腹の中黒いぞとかね。ぱっとわかるんです。

またあの当時、必ず日本の競馬界はこうなりますよとおっしゃってたことが、全部その通りになりましたね。例えば、やがて社台ファームの生産馬が日本競馬の賞金の70パーセントを頂戴するとおっしゃったことがありました。それってすごい金額ですよね。ついに数年前に社台ファームはその言葉を実現しましたね。

当時からそれは大言壮語ですよ。だけどそれが大言壮語に聞こえなかったんです。この人は本当にやるな、この人がこう言ったんだからきっとこうなるだろう、という風にね。吉田さんが亡くなられて、その後息子さんたちが現在の社台ファームをつくってこられました。そしてすごいことは、お父さんが社台ファームは必ずこうなると言ったことは全て実現してきたということですよね。跡を継いだ息子さんたちも立派です。吉田さんとは「優駿」を書くためにお知り合いになって、交流が出来たんですけれど、日本の競馬界のここまでの発展、というのは吉田善哉なくしては語れないですね。

社台ファームのような大きな牧場や吉田さんのような方は、物語りの中で出すつもりでした。トカイファームというのが非常に小さな牧場ですから、その対極としてね。やはり日本で一番大きい牧場を出して、その差というものを表現したかったんです。ですが、物語の中に直接的には登場させたくなかったんですよね。出すとどうしても悪役にならざるを得ないんですよ。大資本と弱小個人商店の闘いみたいなものでしょ。そうすると社台ファームは小説としてはどうしても悪役という図式になるんですよ。そういう風に吉田さんを小説の中で使いたくなかったんです。今回の吉永ファームのような登場の仕方、あれがもうぎりぎりでしょうね。

取材の際、仔馬の出産風景はご覧になりましたか。

仔馬の出産風景は見ました。ただ、馬はすごく繊細な生き物ですから、出産するときに自分の知らない顔がいると、すごく興奮したりするので、牧場の人は嫌がるんです。ですから僕は物陰に隠れて、母馬からは見えないところでチョットのぞく感じで見ましたね。仔馬が顔から出てきてくれると、もうその瞬間に周りを取り囲んでいる獣医や牧場の人たちもほっと一息ですよね。馬はどっちかの足から出てくるのが一番困るんです。足だけ出て胴体がひっかかってしまってどうにも出てこない。帝王切開なんて出来ませんから、足からでてくると殺すしかないんです。

僕は殺す現場も立ち会いました。仔馬の方を殺すんですけど、そのやり方はとても残酷でした。大変なやり方をしないと母馬が死にますから。

印象深い登場人物はいらっしゃいますか。

やっぱり秘書の多田時雄ですね。小説の最後は多田の視点で終わりますから。最初はああいう人物が出てくるというのは、まったく想定してませんでした。物語が和具平八郎の視点に変わったときに、多田という秘書が突然出てきたんですよ。最初多田という秘書を出した瞬間は、あそこまでの役割を最後まで果たしていくということはまったく考えていませんでした。僕の中で多田というのは、映画でいうと通行人みたいな役割だったんですよ。それがだんだんあの物語の影の部分のけん引役みたいになっていました。多田という人物を得たというところが、優駿という小説の成功のひとつの要因となったかなと思います。計算して出てきた人物じゃないんですよ。

短編小説を書く場合は大体の設計図がありますけれども、長編の場合は、どこで誰がどういう風に出てくるか、というのもわかりません。道ですれ違っただけの男が、あくる日になったらぱっと振り返って喋りだす、ということもありますよね。その人物が結局その長編小説のカギを握ってくるということもあるんですよ。

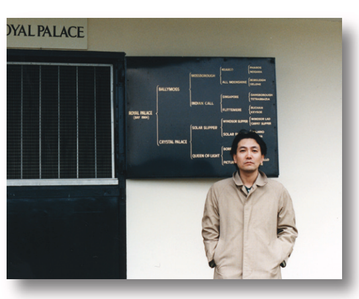
心に残っている馬の名前を教えてください。

僕がサラリーマンをしていた頃、まだまったく小説家になろうなんて夢にも考えてなかった頃なんですけど、一頭の競走馬がいました。その馬は仔馬のときに顔を蹴られましてね、顔が歪んでしまったんです。フサトロコウサンという馬で、普通なら顔の骨が歪むくらい蹴られると死ぬんですけどね、なんとか育ったんでしょうね。それがミラクルバードのモデルですよ。今で言うと１０００万クラス、１０００万円下クラスで行ったりきたりして、３～４勝した馬です。日本の競馬史上に名を残す馬ではないですけど、僕はフサトロコウサンにはなんだかすごく思い入れがありますね。

「優駿」が宮本先生に与えた影響を教えてください。

僕は「泥の河」で太宰治賞、「螢川」で芥川龍之介賞で出発しました。これはどちらも純文学と呼ばれている世界ですよね。僕は小説に純も不純もないと思っていますので、純文学とか大衆小説とかを意識するということは嫌だったんですよね。ところが「優駿」は『新潮』といういわゆる純文学の雑誌で連載されていましたのに、大衆小説に与えられる吉川英治文学賞を受賞したんですよ。あれが大変びっくりしました。「優駿」が候補になったということさえも知りませんでしたし。そのときにふっと、「泥の河」「螢川」で作品が世に出てから10年と少し、「優駿」で吉川英治文学賞をいただいた、まぁ要するに純文学の賞も大衆文学といわれている分野の賞も頂戴したんだ…これは何か、「宮本、もう純も不純も大衆も中間小説もどうでもいいじゃないか、おまえの好きなものを書いていけよ」と言ってくれたのかなと、そういう風に自分で考えたんです。それからちょっと自由になりましたね。日本の文壇のジャンルというものを抜けて、好きなものを、つまり何書いても文学だよ、という考えにぱっと転換できましたね。そういう大きい、自分の心構えとしてのエポックのような作品だったと思います。

1988年頃 社台ファーム謝恩会会場にて



1987年 イギリスニューマーケットにて
有名種牡馬厩舎前

1987年 イギリスダービー観戦（知人と）
エプソム競馬場にて